

# SSKO

栃木ダルク

ニュースレター 第97号(2011, 5, 16)

# Grow up!!

Drug Addiction Rehabilitation Center  
**DARC**

## 「薬物依存症者の自殺防止」

栃木 DARC 代表 栗坪千明

先日、「依存症と自殺予防」というテーマで、自殺予防総合対策センター副センター長で医師の、松本俊彦先生の講演を拝聴した。

その中で、物質関連障害（アルコールを含む薬物依存症）者の自殺リスクが高いという話があり、使用者の16・7%が死にたいと思い、同じ数の人が実際に自殺を試みているというデータがあった。また、アルコール依存症者の28%、覚せい剤依存症者の50%、向精神薬依存症者の55%に自殺傾向が高いという。

私たち依存症のリハビリにかかわる者にとって、自殺と依存症との関係には切っても切れないものがあるが、実際の数字を知って、あらためて危機感を抱いた。

今まで200人近い人たちが栃木DARCを利用してきたが、「死にたい」とつぶやく人は少なからずいた。その要因は、一つには社会的な問題として薬を使い続けることによって借金が膨らみ、さらには窃盗などの二次的な問題を起こし、なりたくない自分になってしまっていることを悲観してのケース。あるいは、精神的な問題として薬物依存の原因となる他の障害（発達障害、統合失調症など）が身近な人たちに理解してもらえず、無力感に陥るケース。または、アルコールや薬物の使用によって鬱状態になり、生きる希望を無くしていくケースなどが多く見られる。

特にこのような自殺念慮は、薬を使わなくなつてから断続的に起きる。その都度、依存症者は生きるか死ぬかの選択を迫られる。そのような時に、自分を理解し生きていくことを勇気づけてくれる仲間がいることは、生と死を分かつ大きな要素である。もし近くに理解してくれる人がいない状態を想像すると、ゾッと。依存症者の場合、この理解してくれる人というのは、家族ではなく、同じ経験を持つ者である場合が多い。

栃木DARCでは、幸い自殺者が出るという経験はしていない。だが、全国に60数カ所あるダルクでは年に数回、残念なことに自殺を経験している。その人たちの多くは仲間から離れてしまい亡くなっている。孤独にならないことがどれだけ重要かが分かる。

以上のように、アルコールや薬物を使い続けることがハイリスクであるのは事実だ。だが中には、薬物依存以外の精神症状を併発していて、不幸にも薬物使用に

って生きる望みをつないでいるという場合もある。そんな時、援助者としてはあるまじき姿かもしれないが、無理に薬物使用を止めようとは思わない。薬物依存であっても生きていてほしいからだ。そのようなケースでは、精神科医療と連携して、生きていくための処置をすることが最優先される。

国の第3次薬物乱用防止5カ年戦略の目標2である再乱用防止の推進の影響もあり、さまざまな機関や人たちが、薬物依存やその要因である薬物乱用に関心を持ち、かかわってくれることは、とても意義があり大事なことである。乱用防止や依存症対策の中に絡み合った、死にまつわるさまざまな問題にも目が向けられるような連携を、私たち依存症に関わる者たちは行っていきたいと願っている。（栃木DARC理事長）

下野新聞掲載 平成22年12月19日



4月1日からアシスタンスが2人になりました。

写真左から安田、秋葉です。

よろしくお願いします。